

# インド洋大津波 犠牲者

# 3割超が子ども

スマトラ沖大地震と大津波は、子どもの犠牲者が極めて多いという特徴を見せている。国連児童基金（ユニセフ）のベラミー事務局長は、「死者の3分の1以上が子ども（18歳以下）と推定される」との見方を示す。目の前で肉親を津波に奪われた子どもも多い。食料・医療などの支援に加え、精神面でのケアも緊急の課題になってきた。

【ナガパティナム（インド南部）大澤文護、ゴール（スリランカ南部）西尾英之、コロンボ花岡洋二

## 日曜の朝弱者をのむ

### スリランカ

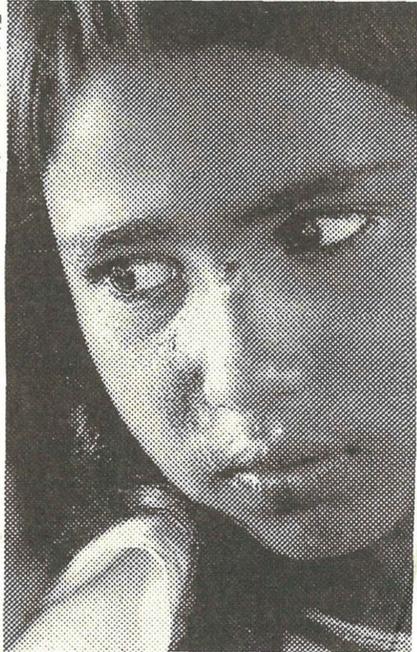
「病院からの聞き取り調査の結果、死者のほぼ7割が児童だった」。スリランカ東部パティカロア県を調査したユニセフ・スリランカ支部（コロンボ）のニールランド児童保護担当官は、無念の表情でつぶやいた。



（2003年、ユニセフ調べ）

	全人口 (千人)	18歳未満 の占める 割合(%)
インド	1065462	38.9
スリランカ	219883	35.5
ネパール	19065	30.1
タイ	62833	30.5
日本	318	49.7
被災各国の人口と18歳未満の比率	127654	17.4

### クローズアップ 2005



「夜になると涙が出る」と時折目を伏せ話したディジャーナさん。津波でうけた顔の傷も痛々しい。スリランカ・ゴール郊外の避難所で3日、梅村直承写真

目撃者からは、流されそうになった時に、木などにつかまって難を逃れた生存者が多くいたとの証言がある。ニールランド担当官は「（死亡した子どもたちは）波に打ち勝つだけの力がなかったの

の朝から日中にかけてで、多くの子どもが海岸に出ている時間帯だった。などが指摘されている。

ともだったとみられる。地元住民は、原因の一つとして津波が日曜（12月26日）の朝に起きた点にあると指摘する。

同町のアッカライペット集落では、漁業で暮らして立てる750戸の住民のほとんどが、海岸で漁網や船の手入れをして

いた。海岸にいた全員が陸に向かって走ったが、まず力のない子どもたち

が波に消えた。次に女性がいなくなった」と住民が力尽きた。「平日なら子どもは、学校に行つて

ユニセフは被災した各国で、政府や地元NGOとともに、親を失った子どもたちを捜し出す活動を行っている。スリランカに関しては、「両親を亡くしたのは数百人から千人未満。片方の親を亡くした児童は数千に推定。スタッフは、はぐれた親子を引き合わせる努力を続け、孤児を祖父母ら親族に引き取ってもらえるよう働きかけている。

また、伝染病の発生が心配される避難所で、体力のない子どもたちが二次被害に遭う懸念も出ている。岡山市のNPO「AMDA」は、スリランカ国内で公衆衛生教育に取り組むことになった。

## 独りぼっちになっちゃった

津波で中心部が壊滅的被害を受けたスリランカ南部、ゴール郊外に設けられた避難キャンプ。「お母さんとお姉さんと弟が死に、私は独りぼっち。お母さんのことを考えると涙が止まらない」。12歳の少女ディジャーナさんはうつろな表情で、そう話した。

ディジャーナさんはその時、自宅隣のおばの家で朝食を取っていた。押し寄せた海水で壁にたたきつけられ、顔や手足を負傷。泥とがれきの町を必死に走り、たどり着いた避難所で「お母さんたちは亡くなった」と聞かされた。

1週間以上が過ぎ、顔の傷は治りかけてきた。しかし、心の傷は深く、癒やされない。「夜中になるとお母さんのことが頭に浮かんで、涙が止まらないの」。母親からいつも「一生懸命勉強しなさい」と言われていた。「もう一度学校に行きたい。でもかばんもノートも全部流された。どうやって学校に行けばいいの」

避難所では約100人の子どもが暮らす。半数以上は肉親のだれかが死亡するか行方不明になっている。「昼間は元気でも、夜になると泣き出す子がいる。あの時のことを思い出すのでしよう」。世話をしている女性の1人がうち明けた。